



新開町

しんがいまち



十 和・大正方面
から国道381号で窪川の街中に入る時に、コンビニエンスストアとホームセンターを過ぎ、すぐに四万十川を渡る。渡りきったところから新開町である。信号を右



吉見川が四万十川に合流する

整備に励む。まず、吉見川に橋を架け、現在の茂串町や本町一帯に家臣を住まわせることによって、交通と軍事の要衝であった窪川の警備体制を整えた。古溪城自体は、1615年の「一国一城令」で廃城となったのであるが、窪川山内家初代である一吉

折し吉見川を渡るまで、左手に迫る古溪山と吉見川に挟まれた三角地帯である。以前は、吉見川が四万十川に突き当たるような形になっていたのであるが、近代になって四万十川の流

れに沿って合流する形に変えられた。古溪山上には、慶長6年(1601年)土佐藩主山内一豊の命を受けて、

家老であった林勝吉(かつよし)が築いた古溪城があった。林勝吉は、この時、一豊から「山内」の姓と「一」の字を与えられ、山内一吉(かつよし)と称した。

一吉は、城の麓に土居(元は防御のための土塁のことであるが、中世以来、土塁で防御された屋敷のことをいう)を構えた。土居屋敷には山内家の住居の他、馬屋や武器庫などがあり、その周囲は土塀で囲まれていた。

これが新開町の始まりである。したがって、以前は新開町を「御土居(おどい/おんどい)」と呼んでいたらしく、ご年配の方々の中には今でもそう呼ぶ方もいらっしゃるようである。

さて、窪川村周辺35カ村を任された一吉は、この土居屋敷を拠点に周辺の



窪川山内氏が統治を任されていた頃の絵図の写し

現在の窪川の街の成り立ちは、新開町から始まったと言って良い。茂串山城(旧窪川町役場の南の茂串山上)があった戦国期には、まだ「街」とは言えなかった窪川は、一吉による古溪城築城と、それにともなつて麓に築かれた土居をスタートにして、いよいよ「街」となつていったのである。

「御土居」新開町には、現在71世帯、159人が暮らしている。

町のうごき

(6月30日)	人口	前月比	出生	死亡	転入	転出
男	8,327	2	男 3	5	14	10
女	9,302	-7	女 4	12	15	14
計	17,629	-5	計 7	17	29	24
世帯数	8,607	3	(6月中の届出)			
窪川地域	12,389人		大正地域	2,506人		十和地域 2,734人

四万十川の水質状況

	適正值(mg/l)	7月11日
リン酸	≤ 1.0	0.421
硝酸	≤ 0.5	0.567
アンモニウム	≤ 5.0	測定範囲以下
アニオン活性剤	≤ 1.0	0.05
化学的酸素要求量	≤ 10.0	測定範囲以上

調査：大正(吾川)
資料：四万十高校自然環境部